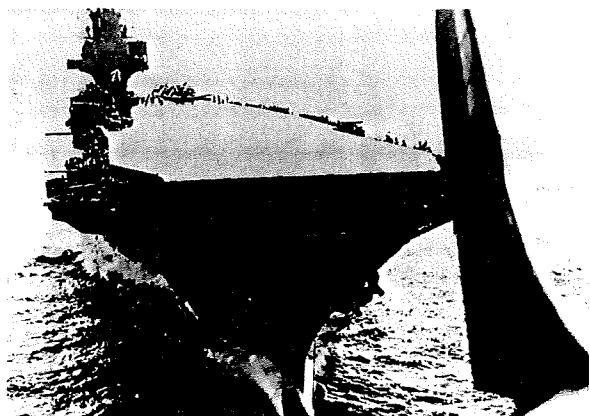


脈々たる空母機動部隊の遺産 世界の海軍戦略思想を革新した 太平洋上の日米のバトル



アメリカ海軍空母エンタープライズ。

世界を震撼させた日本海軍の戦略的航空機動作戦と海軍艦艇と連動したアメリカ海兵隊の縦横無尽の活躍……。第二次大戦中、太平洋正面で展開された日米の戦いは海軍戦略思想に大きな影響を与え、変革をもたらし、その遺産は現在の世界最強の米海軍に引き継がれている。

文＝平間洋一
Hirama Yoichi

海軍戦略をリードした日米

第二次世界大戦中、七つの海で多くの海戦が繰り広げられたが、大西洋や地中海におけるドイツとイギリス海軍の戦いは、主として潜水艦戦（一部、水上艦艇や航空機による戦闘もあった）であり、それを保護する対潜戦や船団護衛戦であった。バルト海やカスピ海などでドイツとソ連海軍の間でも海戦はあったが、それは小型艦艇による機雷敷設戦や掃海戦、陸軍を支援する輸送作戦や小規模な上陸作戦であり、これら三国海軍の戦いが世界の海軍戦略思想を変革させることはなかった。

を与え、今日の海軍戦略や海軍軍備に大きな影響を与えたのは、太平洋正面の日米海軍の戦いであった。そこで本論では英独海軍や独ソ海軍などについては触れる程度とし、第一次大戦以後、日米海軍がどのような海軍戦略の下に兵力を整備して第二次大戦を戦い、その戦いが現在の海軍戦略や武器体系をいかに変革したかを検証してみたい。

日本の戦略的航空機動作戦

ワシントンやロンドン軍縮会議で、主力艦や補助艦艇の保有比率を劣勢に抑えられた日本海軍は、新しい戦法および武器を開発しなければならなかった。それが、太平洋を横断して来攻するアメリカ艦隊を潜水艦や航空機によって反復攻撃し、勢力の漸減に努め、さらに機をみて水雷戦隊や主力艦による決戦により撃破するという、教段階からなる邀撃漸減作戦であった。

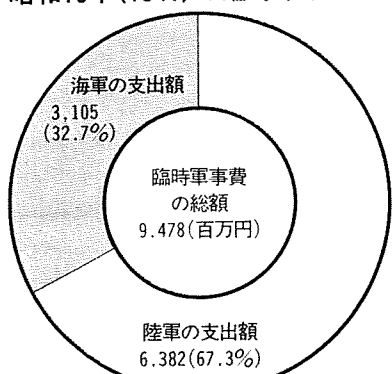
そして、日本海軍は潜水艦や航空機を重視し、大型潜水艦や零式戦闘機、一式陸上攻撃機などを開発し、さらに、中国との戦いで戦術・運用・装備・術力や後方支援能力などを急速に向上させていった。

次いで、南洋委任統治領の軍事利用を制限したワシントン条約破棄後の昭和十二年（一九三七）以降は、南洋群島の航空基地化を進め、空母航空兵力のほかに陸上航空兵力を対米邀撃漸減兵力に加えた。邀撃漸減作戦の主役を潜水艦、水雷戦隊から徐々に航空部隊へと移行させ、昭和十六年（一九四一）一月には陸上航空部隊を統一指揮する第十一航空艦隊を、同年四月には空母八隻に駆逐隊を付属させた四個航空戦隊からなる第一航空艦隊を編成した。

日本海軍は、太平洋戦争開戦時には、アメリカの空母八隻（太平洋正面は三隻）に対し一〇隻を保有する、世界第一の海上機動航空兵力を保有するに至っていた。

しかし、中国との戦争が長期化した

昭和16年(1941)の臨時軍事費



臨時軍事費中に占める海軍の支出は約33%、陸軍の支出は2倍強の約67%。陸軍が重視されていたことがわかる。

て国力が消耗し、さらに陸軍予算が重視されて航空兵力が著しく不足してもいた。そして、連合艦隊司令官の山本五十六大將は、日米の生産力の隔絶した相違から、「カカル成算少ナキ戦ハナスベキニ非ズ」と海軍大臣に上申し、避戦を訴えてもいた。この上申しが認められず、追い詰められた山本が強硬に主張した作戦は、桶狭間、ひよどり越えと川中島の戦いを合わせた、開戦劈頭の空母機動部隊によるハワイ奇襲作戦であった。そして山本は、空母六隻から三五〇機の航空機を発進させ、戦艦四隻を含む六隻を撃沈し、戦艦四隻、軽巡洋艦三隻、駆逐艦三隻などに被害を与え、航空機一三三機を撃破した。現在の第七艦隊の空母任務部隊の用法に連なる、世界最初の戦略的機動海上航空作戦であった。

次いで翌年二月には、空母四隻から飛び立った一八八機がオーストラリアのダーウィン港を、四月には空母五隻の二二八機がセイロン島のロンボヤトリンコマリ港を攻撃し、さらに航行中の重巡洋艦ドーセットシャーとコーンウォール、続いて空母ハーミスを撃沈した。ハワイに次ぐ大規模な戦略的航空

機動作戦であり、この空母六隻を使用した大規模なハワイ攻撃と、それに続き南雲機動部隊が太平洋からインド洋へと地球の三分の一を駆け抜けた、空母機動部隊の絶大な機動力と破壊力に世界は驚嘆した。

さらに開戦二日後の十二月十日には、陸上攻撃機が、作戦行動中のイギリス東洋艦隊の最新鋭戦艦プリンス・オブ・ウェールズと巡洋戦艦レパルスを撃沈した。

これは航空機対戦艦の世界最初の海戦であり、列国海軍の戦艦至上主義を根底から覆した海戦であった。しかし、この航空部隊の能力は、人種的偏見を持ち、「日本人は航空機の操縦には不適」と考えていた英米海軍からは殆ど注目されていなかった。

米海軍の海兵隊と支援艦隊

アメリカ海軍の特徴は、マハン大佐が『海上権力史論』で提示した「シパーワー」と呼ばれる制海思想であり、海軍力によってモンロー主義やヘイ・ドクトリンを実現しようとする政治性の強いものであった。そして、その兵力は「敵艦隊の撃滅を最高の目標とする」艦隊決戦論に従い整備されてきた。

中国市場の門戸開放、機会均等を唱えるヘイ・ドクトリンを擁護し、戦艦を中心として、動くマジノ要塞が太平洋をブルドーザーのように西進することを夢見るアメリカ海軍にとって、日本海軍が最大の仮想敵国であり、最大の障害が日米間に横たわる太平洋の広がりであった。

標準的対日戦争計画は、ハワイに集結した大艦隊が日本の委任統治領を奪取し、これを基地として利用しつつ対日包囲網を縮めていく作戦であったが、この作戦の成否は「修理を完了し十分に補給された部隊を、いかに決戦が行われる戦場に適時適切に展開するか」という補給問題にあった。

一九一四年にパナマ運河が完成し、問題は大きく前進した。しかし、グアム、フィリピンの軍備を凍結したワシントン条約が、対日戦争をより困難なものとしてしまった。ハワイの軍備強化はワシントン条約の適用外とされたが、ハワイ・フィリピン間五〇〇〇マイルを、膨大な物資を運ばなければならないという問題は解決されなかった。

一九一九年及び一九二二年に太平洋岸に戦艦が配備され、また一九二

*モンロー主義=1823年、第5代大統領モンローが宣言を發したのに始まる。欧米兩大國の相互不干渉を主張するアメリカの外交政策の原則。
*ヘイ・ドクトリン=1899年、國務長官ヘイが中国への門戸開放主義を提唱した。寛量、アメリカ型の経済主義的な対外政策の原型をつくった。



ギルバート諸島タラワに上陸し、日本軍滑走路へ進軍するアメリカ海兵隊員(1943年11月)。機動性に優れた海兵隊は水陸両用作戦を縦横に展開し、ガダルカナルから沖繩まで、上陸作戦の先鋒として活躍した。

海軍は戦争中に一一七〇隻の潜水艦を建造して八六三隻を出動させ、戦闘艦艇一四九隻を撃沈し、四八隻に損害を与え、商船二八八二隻(一四四二万トン)を撃沈し、二六四隻(一

が認められ、海軍の再建を開始した。しかし、戦略思想の分裂やヒトラーの好みもあり、列国海軍同様に戦艦(ボケット戦艦)や巡洋艦、航空母艦(未完成)などを何らの戦略もなく建造したため、イギリスを飢餓寸前にまで追い詰めた潜水艦は、開戦時に協定で認められた隻数より一六隻も少ない五六隻、しかも外洋行動ができるのは二三隻に過ぎなかった。

九九万トン)に損害を与えた。この水面下の敵との戦いにイギリス海軍の駆逐艦、フリゲート、コルベット、スloopなどの護衛艦艇が活躍したが、開戦前に建造された一五隻の戦艦や戦争中に建造された五隻の戦艦も、ビスマルク追跡作戦などに動員し一部が砲火を受けた以外、空母や船団の護衛、上陸作戦の支援に終始した。

の動きは極めて乏しく、ソ連海軍が実施した作戦としては地上部隊の沿岸翼側防衛、沿岸航行船舶の護衛、主要都市の防衛、包囲された陸上部隊への補給支援などであり、公式のソ連の第二次大戦史には「海軍は陸軍作戦に協力し、良く祖国防衛の大任を果たした」としか書かれていない。

敗北に追いやって。そして現在では、沿岸から六〇〇マイルも内陸に侵入可能な航空機を搭載する空母部隊、強襲上陸能力だけでなく空輸能力をも持った海兵隊艦隊随伴の高速洋上補給部隊などからなるタスク・フォース(機動任務部隊)を誕生させ、アメリカ本土から数千マイルも離れた地域のあらゆる事態に即応する戦力を投入する世界最強の海軍を造り出し、バックス・アメリカーナを確立したのである。

*バックス・アメリカーナ=海軍空母部隊の広域洋上制御能力によって世界の海の自由航行権を確保するように、アメリカが絶大な軍力によって世界を掌握している状態。

開戦時のアメリカ主要艦艇戦力 (護衛空母は含まず)

	アジア地域	太平洋地域	大西洋地域	合計
戦艦	0	9	8	17
空母	0	3	4	7
重巡洋艦	1	12	5	18
軽巡洋艦	2	9	8	19
駆逐艦	13	54	147	214
潜水艦	29	25	60	114
合計隻数	45	112	232	389
総トン数	763,600		662,400	1,426,000

巡洋艦以上の大型艦艇に限って比べてみると、開戦時における日米両国の艦艇戦力はほぼ互角といえる。だが、アメリカが既定の艦艇建造を実現する余力を十分に残していたのに対し、日本の国力はもはや限界に達しつつあった。開戦後、消耗戦が推移するにつれ、日米の艦艇戦力の差はますます拡大していく。

開戦時の日本主要艦艇戦力

	連合艦隊	その他	合計
戦艦	10	0	10
空母	9	0	9
重巡洋艦	18	0	18
軽巡洋艦	18	2	20
駆逐艦	93	19	112
潜水艦	57	7	64
合計隻数	205	28	233
総トン数	925,109	51,079	976,188

〇年代には燃料が石炭から石油に転換されて補給問題は一步前進した。しかし、輸送量の増大は、航空空母の陸上航空兵力に対抗する航空兵力を展開するには、各種機材や燃料飛行支援施設、部品などを含めれば、日本海軍の五倍から一〇倍の物資を運ばなければならぬという新しい問題を生じさせた。

存在理由を得た海兵隊は、勢力も一万六〇八五名から二万五九五名に増員され、一九二二年には呼称も遠征海兵隊と改称され、一九三三年には上陸作戦を専門とする艦隊付属の小型旅団規模の艦隊海兵隊がクワンチコに、一九三五年にはサンジエゴに新編された。

イギリス海軍は「海洋を制するものは商業を制す」というウォルター・ローリーの主張を具現化し、フランスのとれた「Well Balanced Navy」をモットーに大海軍を建設し、太陽の没することなき世界に冠たる大英帝国を建設して、七つの海にユニオンジャックを翻してきた。

英・独・ソの海軍

一方、第二次大戦中のソ連海軍は、高級幹部の粛清や亡命などによる指揮官不足から、艦隊の稼働率や練度大幅に低下し、さらに、ロシア革命の時のパルチザン戦の経験やレーニンの教義が海軍戦略を支配していた。陸軍と協力して国土を守るという「小さな戦争」理論から、潜水艦哨戒艦艇、高速駆逐艦などの軽快艦艇および航空部隊などを整備して第二次大戦に臨んだ。

このため第二次大戦中のソ連海軍は、資源や生産力に欠け、兵力を消耗してしまった日本海軍に出来る戦術は「七生尽忠ノ信念ヲ源力」とする特攻攻撃しかなかった。そして日本海軍は、「十死零生」の救国兵

器震洋、回天、海龍、蛟龍、震龍、伏龍、さらにロケット機桜花などの特攻兵器を整備し、湊川の楠木正成のように必敗の戦いに「非理法権天の詭観」と「散華の美」を發揮して、自滅してしまったのであった。

脈々たる空母機動部隊の遺産